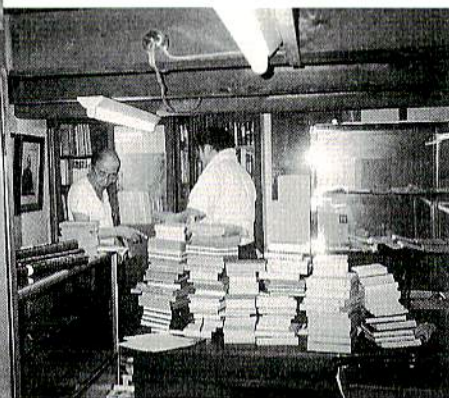


『ありし日の^{ばい}唄先生』

◀ 昼食風景（年代不明）
・唄先生（右側）と榮先生（左側）

記念館資料展示室（土蔵）の ▶
展示準備作業（1992年5月）
・唄先生（左側）と藤巻和弘氏
（右側）



◀ 榮先生の資料見学(1992年4月)
・米沢興譲館高校の資料室にて



第 16 号

発行日/2011年11月15日

発行/我妻榮記念館事務局

☎992-0045

米沢市中央3-4-38

TEL-FAX 0238-24-2211

唄^{ばい}孝一先生のこと

館長 上村 勘 二一

唄孝一先生は、我妻先生と共に編『判例コンメンタール』『戸籍法セミナー』法制審議会民法部会身分法小委員会等の共同の仕事を通じて緊密になられました。

昭和四八年に我妻先生がご逝去された後は、編集世話人として『追想の我妻榮 険しく遠い道』をまとめられ、『我妻榮生誕百周年記念誌』には「我妻緑さまを偲んで」の原稿を寄せてくださいました。

平成四年の我妻榮記念館開設に当たり、我妻先生のご遺族から寄贈を受けました直筆の原稿や著書や遺品を整理していただき、また開館後も何度も米沢を訪問され、目録の作成や展示方法のご指導をいただきました。

詳細な様子を記念館だより第二号に寄せておられます。

唄先生は昭和三五年にお母上様の突然死をきっかけに、医事法の研究を行われるようになりました。世界医事法学会副会長、日本医事法学会代表理事等を歴任され、平成十五年に文化功労章を受章され、今年一月十一日

に八六歳でご逝去されました。唄先生は「温歩前進」を心掛ければ、資料重視の姿勢を貫き、現場に本当の学問があると、多くの方々から丁寧に聞き取り調査を進められました。

唄先生は医事法に取組んだ事を背伸びではないかと思う時もあったようですが、我妻先生は唄先生の納得が行くまで丹念に取組まれる態度を、馬鹿塗りと言われてユーモアたっぷりに励まされたそうです。

病床でも眠りから覚まされた時「我妻先生」と呼んでおられたことなど、偲ぶ会で幾度も我妻先生に関わるお話を拝聴し、話の端々から唄先生の我妻先生への尽きない敬慕の念を知りました。

友人の高野耕一さんは、唄先生を多忙という標識が働いていると表しています。唄先生は我妻先生に「一生懸命な生涯」との追悼文を送られています。唄先生も「一生懸命な生涯」であったと思います。

ご冥福をお祈り申し上げます。

『我妻榮先生講演より』

我妻榮先生は東京大学教授時代以来、特に東京大学を停年で退官されてからは、研究、執筆、学術会議などの合間をぬって毎年のように郷土米沢を訪れられ、そのつど母校である米沢興譲館高等学校に立ち寄られ、後輩である生徒たちを激励して下さいました。そこで生徒たちにお話されたものを載せてみました。

地方の高校生の責任

昭和四十一年・講演

只今、北沢先輩から、米沢の歴史についていろいろのお話を承りましたが、私は、同じ明治の人でも、あれだけ米沢の歴史を腹の中に入れておりませんので、私自身の経験した話をしようと思います。

北沢さんは、「北沢先生といわれるのは面白くない。私の方は我妻先生であるのは当然だ」と言われたのですけれども、実はこれは必ずしも当然ではないんです。というの、わたしの父が、この旧制中学で長いこと英語の先生をしておりましたので、我妻先生のお子さんと言われ、我妻先生とおっしゃらなかったんです。親父が死んじゃったものだから、亡くなった我妻先生のお子さん言うの



は厄介ですから、上の方がとれちゃって、私が、我妻先生ということになったのです。のみならず、私の親父は、児雷様という紳名だったので。田舎の中学の紳名にしては、少し洒落過ぎていると思うんです。ともかく、うちの親父さんは、大変生徒から信望があったものですから「児雷様」と、様をつけて言う人が多かった。私が同じ学校に入学しました時、親父にくっついて学校に来たわけで、早速私は児雷子という名前を貰った。私の紳名は児雷子なんで、その辺にいらっしゃる大先輩は、私をこの間まで児雷子とおっしゃっていた。実は、私には児雷子と言われた方が、この校舎の中ではびつたりする思い出の言葉でありました。

北沢先輩とは、七年か、八年違うんで、私が旧制中学に入った時には、もう卒業して第一高等学校の生徒で、我々の憧れの的だったので。その当時、お医者さんになられた矢尾板誠策さん、海軍の方へお入りになりました小林仁さん、そして北沢敬二郎さんを三秀才と申しました。北沢さんは、東京大学法学部を目指していましたが、将来、法学部へ行こうとする者にとっては、まさに憧れの的だったので。もともと、その後には、私も加わって四秀才となつたらしいんです。その後また米沢中学校、あるいは興譲館高等学校何秀才になっていくことだろうと思います。



誌の付録として、「私の試験勉強」という題で書いたことがあります。その初めの部分を読んでもみます。

きょうは、私の試験勉強の話をしてしよう。

一生の間にずいぶん沢山の試験を受けた。その度に試験勉強をしたわけだが一番辛かったのは、第一高等学校の入学試験（大正三年）、つぎは、大学の一年の試験（大正七年）、それから、大学の三年のときの高等文官試験（大正八年）。この三つは、私の一生の三大試験だった。

三つとも、いずれおとらず辛かったが、辛さの性質は多少違う。一高の入学試験は、責任感と不安の念とに責められて、一番苦しかった。一三貫の病弱な身体から一

貫目以上やせた。疲労こんばいしてゴールにかけこんでたおれた。といつてもよいほどだった。それにくらべると、大学の一年の試験は、不安は不安でも、どっかに自信があった。高文の試験は、暑い盛りに、分量の勉強をするのが辛かったというだけで、不安というほどのものはなかったから、気は楽であった。

一高の入学試験の話をして、諸君の興味をひかないかもしれないが、とにかく、私は、山形県米沢市という田舎の中学を出た。

この中学は、上杉藤山公の遺徳の一を伝える優秀なものだなどといわれたのは、昔のこと、私の卒業する頃の成績は、いっこうかんばしくなかった。私の卒業する前々年の卒業生から、久しぶりで二人一高に入学した。それに気をよくして、前の年には、選り抜きの俊秀が十数人受験したが、無残にも全滅、二人の入学者もなかった。私は、五年間首席で通し、卒業の成績は平均九六点七分という空前のレコードだったので、先生たちも、これなら一高の難問も突破するだろう、と望みをかけた。ことに、私の父は、この中学で英語の先生をしていたので、息子が失敗するようなことがあっては申し訳ない、と苦慮していた。こうして、いわば郷里の希望と父の祈願を負

わされて上京した私は、ほんとうに、入学試験に失敗したら郷里には帰れないと思いつめるほど、悲壮な気持ちを持っていた。当時は、三月に中学を卒業して六月に入学試験だったから、その間の三ヶ月を、神田のニコライ堂の下にある開成中学の予備校に通った。東京の中学を卒業した学生たちは、なんとりこうにみえたことだろう。田舎の中学の秀才は、言葉もロクに通じない。焦躁と不安の三ヶ月、文字通り骨身をけずった。

でも、こんな話は、諸君の参考にもなるまい。ただひとつだけおもう。私は、入学試験勉強としては、中学三年からの教科書を全部極めて詳細・正確に復習することをその中心とした。受験のための参考書は、その時分にも、むしろ沢山あったが、私はほとんど見なかった。狭く深く、徹底的に理解する。これが私の一生を通じての勉強方針といってもよいかもしれない。

義兄の孫田（法学博士孫田秀春先生）の忠告に従いまして、さつき申した小さい予備校に入りました。戦後亡くなりましたが、県知事をした、南原出身の中学の同級生、江辺清夫という男と二人で入ったのです。予備校の先生は、我妻、江辺なんて変な姓が並んだものだから、我妻のところをアツ

マと読むのは良い方で、ガサイなんて読む。ガサイなんて言ったら中国人ですからね。次に、江辺とまたわかんないのがでてる。「これコウヘンかな」、コウヘンなんて姓ありません。クラスの奴らはクスクス笑っていたんです。

ところが、東京の中学校を卒業した奴って世の中のこと、何でも心得ているような顔をしている。先生が、色々な問題を黒板に出しますとペラペラ言うんです。米沢の中学校の非常な秀才だなんて言われたって、こりゃ駄目だと思っただけです。

幾何の授業で、先生の証明について、もつと直截簡明な方法があると思つたものだから、江辺と二人で「あれはちよつとおかしいぞ。俺たち知つているのと違うじゃないか」と言つたら、他の学生は「そうだ、そうだ、言え言え」と言いますから、いきなり「ハイ」と立ち上がってしゃべったんです。そしたら米沢弁が通じない。学生達は笑っている。ところが、先生は、言葉がわからなくとも、言っていることがわかつたものですから直ぐにピンときた。「君の方がいい」と言つて直された。学生の奴らは拍手喝采して「先生月謝割引キー」と言うのです。

来館者のコーナー

榮先生の勉強部屋に雑記帳を置き、来館者の方に自由に感想を書いていただいたものです。

新63期 U・S
我妻先生の本を読んで勉強をしていました。明日からまた、法律家として研鑽を励みたいと思います。

新63期 U・S
我妻先生のダットサンには大変お世話になりました。これからも精進します。

N・O
資料の多さ、凄ましい努力ぶりに称賛いたしました。一学生としていろいろと刺激になりました。これだけの資料が残っていることは、大変なことです。益々のご隆盛を祈念いたします。

H・S
先生の勉強、研究のご様子を知ることができ大変感銘を受けました。大変な時期ですが、これからも勉強に励んでいきます。

新63期 K・H
L Sで学んだ事を生かせたらと思います。 H・Y
微力ながら、先生の意思を継げればと思います。 N・A

弁護士仲間と見学に来ました。我妻先生は、勉学の才能があるだけでなく、志も高い方だと感じました。

61期 M・W
法律の勉強をし、現在試験の発表を待っています。もし合格したら、先生の成績には及びませんが社会の役に立てるよう努力したいと思えます。

T・H
福島から三人で来ました。昔でも残してほしかったです。いつも感じる事ができました。いつまでも残してほしかったです。

M・S 他
法律の勉強をし、現在試験の発表を待っています。もし合格したら、先生の功績には及びませんが社会の役に立てるよう努力したいと思えます。

T・H
実務研修を終える前に、一度拝見したいと思つてやってきました。今後とも勉強していきたいと思えます。

第64期 Y・H
六十八歳にして大先輩の生家を訪ねました。生前におめにかかっていましたので、感無量です。

N・S
これから法律で身を立っていく者として、先生の御意思を感じたく、九州福岡より参りました。

先生が残された民法を、先生の御意思に違わぬように運用して参ります。

今、感動の中にいます。ありがとうございました。U・N
今、審議会で議論をしている債権法改正の論点の多くが民法講義の中で論じられています。すばらしい。

T・K
米沢に避難して、はじめて我妻先生を知り訪れました。「守一無二無三」という座右の銘、私の心にも期するものを感じました。

H・S
先月新司法試験に合格し、修習前に実務での影響力の大きさと、学問への姿勢を学びに参りました。人間社会がある限り、法的紛争に終わりはないと思いますが、先人の歩みに何か一つでもつけ加えることのできる法律家になりたいと考えています。

新65期 H・O
恥ずかしながら弁護士になつて、先生の民法講義をよく拝見するようになりました。（現代からすれば）決して広々とは言えないこの家から勉学を始められ、ついには日本法学界を率いていった先生のご先見とご努力（判例カード、大変頭の下がる思いです）まことに畏れ入ります。日本法律の発展に微力をつくしたく存じます。

新63期 G・S

我妻 栄・向林 仍 元里文化賞 米沢児童文化奨励賞表彰式



児童文化賞に輝いた田中瑛君（米沢三中3年）は、「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」において中学校の部約四万七千点の応募数から「審査員特別賞」に選ばれたことが評価されま

した。ルワンダ人の留学生のホストファミリーとなった体験を通して、国際交流活動に自分がどのように行動すべきかを真剣に考えた作品です。誠におめでとうございます。

優れた文化的業績をあげた中学生に贈られる第18回「我妻児童文化賞」の表彰式が、去る2月26日（土）ホテルサンルート米沢で行われました。表彰式には安部市長さんをはじめ来賓の方々、付添いの先生方や保護者の皆さんの見守る中で、小林会長から表彰状と記念品が授与されました。

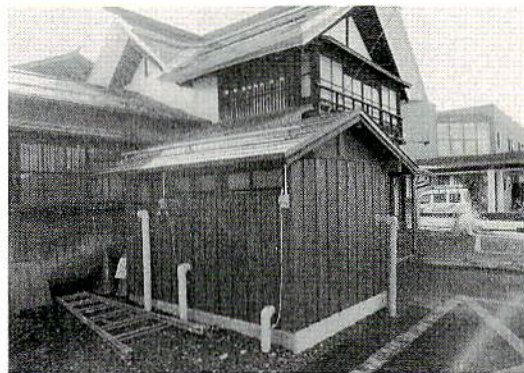
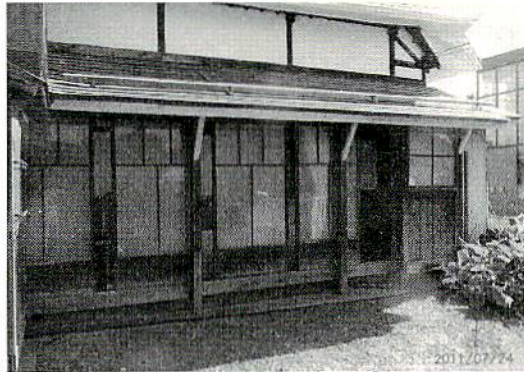
我妻榮児童文化賞

記念館の改修工事

3月11日に発生した東日本大震災で、記念館も外壁の一部が剥がれ、トイレが傾く被害を受けました。また、5月下旬には資料展示室（土蔵）に白蟻が大量に発生し、建物の改修の必要に迫られました。

米沢有為会として修繕工事を

行うこととし、その中、清和特許法律事務所名誉会長（有為会東京支部会員）青木朗様より御寄附の申し出があり、8月に無事完成し、来館者の方々に従来通り記念館を見ていただくことができる様になりました。



訃報

我妻榮記念館第二代館長、運営委員、顧問として記念館運営に多大な御尽力いただきました今田久夫氏が、九月三十日に死去されました。御冥福をお祈り申し上げます。



記念館のスタッフ

よろしくお願ひいたします。

名誉館長	我妻 堯
顧問	松野 良寅
顧問	小関 薫
館長	上村 勘二
事務局長	鈴木 幸一
運営委員	遠藤 拓
運営委員	安部 敏
運営委員	五十嵐 京子
運営委員	高橋 節子
運営委員	本多 和彦
管理人	小林 秀一

開館日のご案内

金曜日、日曜日、月曜日を閉館日とします。

開館時間帯は
金曜日、日曜日が午後1時から4時まで、月曜日が午前10時から午後4時までです。

入館料 無料

